

創刊にあたって

学長 平 山 朝 子

本誌は、本学教員の研究報告のために、年1回を基準に刊行するものである。開学から10ヶ月で、本誌の編集作業を終えたことは素晴らしい。本学教員は4月に41名で発足し、当然のことでもあるが、これらの教員はそれぞれ異なる立場で活動してきた者である。ここに取り上げた報告は、すべて、この10ヶ月の共同作業であり、組織的に取組んだ成果の一部である。

看護学は、国民の健康と福祉を支える学問であり、極めて実践性・応用性の高い特質を持って発展させていかななくてはならない。その努力の柱として、本学では開学当初から、県内の現実に直結した研究をすることを教員共有の方向性としてきた。そのため、県下の現職看護職との共同研究、現職看護職が看護サービス提供に際して抱えている課題を素材とした研究を取組むための軌道を敷いてきた。これは、本学が県立の看護学の高等教育研究機関として、近い将来、真の意味での岐阜看護学会の発足や岐阜看護学会誌刊行をねらい、その基盤づくりへの努力の一つである。本誌の刊行は、その意味で、本学の理念に沿った看護学発展の努力の一端を現状報告したものでもある。

本誌は、本学が目指している特色ある教育研究活動の内実を一層効果的に創出して行くために、毎年刊行していくが、大学が完成年度を迎え、さらには大学院が設置されて実績を積み上げていく頃までには、紀要としての内容を年々充実・発展させたい。

また、本学の教育活動の特徴として、講義・演習・実習すべての面で複数の教員や講座単位で取組む場面が多いことがあげられる。そのため、各授業科目を展開する前には、講座内での準備が共同作業にかなり時間をかけ、固有の方法を創りだして特色ある教育が実現している。これらの内容も、教育研究として本誌に報告してほしい。本学では、教員集団の教育機能の開発、教員の教育能力の開発を目指した組織的な取り組みを開始してきているが、上記の教育活動に関する研究報告は、そういった教員研修の重要な資料としても活かし、教育の質の向上を目指したい。

本誌は、紀要委員会が中心になり作成したものであるが、内部査読委員による査読を実施している。したがって、あまり厳格で形式的な規制をすることなく、独創的な内容となるように、そして発刊の趣旨を歪めることのないように、という点を重視して編集しているはずである。読者の方々には、お気づきの点やご意見をご指摘願いたい。

とくに、岐阜県内の看護職の方々には、本誌をご覧いただき、大学の目指しているところなどにつき、ご意見をいただきたい。

平成13年3月